

マルコ 11 章 15-19 節 「危険な男たち」

「イエスさま」はどんなイメージでしょう？ほとんどの方が、優しくて笑顔の方と答えるでしょう。でも、イエスさまは異なる立場の人々から見ると、「危険な男」です。今日の箇所では、イエスさまが神殿で暴れたと書いてあります。イエスさまがなぜ暴動を起こしたのか。確実に言えることは、この暴動によってイエスさまは当局に、彼を逮捕する理由を与えてしまったということです。

どのような主張であれ、何かを主張するときには、決して暴力的な手段をとってはいけません、というのは今や私たちの常識になっています。「言論の自由」が保証されているからこそ、暴力を使ってしまったら、その主張の善し悪しとは関係なく、暴力をふるったことが「悪」とされてしまいます。でも声の大きい人やメディアほど、言論の自由の公正さはありません。暴力を肯定してはいけませんが、暴力でしか自分たちの存在と主張を表現できないほどにまで権利を奪われ、仲間を殺され、追いつめられた人間が現実にいるということを私たちは考える必要があるのではないかと思います。8月の平和月間において、一人の人物を見てまいります。

それが、ドイツのディートリッヒ・ボンハッフアー牧師です。彼は 1906 年に生まれ、戦乱の中を過ごしていきます。ヒトラー政権のもと、言論の自由を掲げヒトラーを批判するにも限界が生じ、彼は次第に、「実際にこの悪を止めるためにはどうすべきか」を考えます。そして彼は「反ヒトラー抵抗運動」に加わり、最終的にヒトラー暗殺計画を実行したその一人と言われています。聖書には「あなたの敵を愛しなさい」と書いてあります。また「殺してはならない」という戒めもあります。聖書の言葉に従いたいと思いながらも、時代の中で苦しみながら聖書の教えとは異なることをしてしまった人々が多くいたのです。キリスト者、まして牧師は人を殺してはならない。たとえその敵がヒトラーであったとしても、それは破るべきではなかった、と言う人がいます。でも逆にボンハッフアーがやったことを評価する人もいます。

イエスさまとボンハッフアー。二人の抵抗者を挙げましたが、二人とも最終的には処刑されています。それを思うと、言論の自由とか社会への批判というものは、血を流す覚悟がないと貫くことはできないのかと思わされます。この世で何か意見を主張するということは、たとえ殺されなくても、ある程度の反論、誹謗中傷、攻撃にさらされることは避けられません。ですから私たちは、何か意見を主張するときに、多少攻撃されてもへこたれないような精神力を身につけないといけません。自由を本気で求めるのなら、物理的であれ言葉のうえであれ暴力を受けることは必至です。あるいは無言のうちに加えられる心理的な暴力もあります。それは覚悟して欲しいと思います。

みんなの命と自由を守るために、自分の自由を、あるいはひょっとしたら命をも犠牲にせねばならなくなることがあるかもしれません。今日の聖書のイエスさまを見ていると、暴力を肯定しているかのようにも見えてしまいます。しかし、イエスさまはなぜ騒ぎを起こしたのか。それは、「ここは祈りの場」であるということを伝えたかったのです。この神殿は、誰のための、何のための場所なのか。もう一度思い出しなさい、と。自分にとって、「この世で自由に生きる」とは何なのか。そして、その自由に生きるために、私たちは誰を信じて生きていくべきなのか。この場はどのような場所なのか。礼拝で、神さまの前で祈り、神さまに心を向けているのでしょうか。私たちの心からの礼拝と祈りがささげられますよう、自由に行動できますように。